



TITLE:

ニホンザル研究林(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

CITATION:

ニホンザル研究林(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1979, 8: 24-24

ISSUE DATE:

1979-01-13

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162826>

RIGHT:

昭和52年度サル施設経費概算

項		目	金額 (千円)
ケ	一	補修費	475
備		品費	613
サ	ル	類購入費	370
サ	ル	飼料購入費	7,432
薬		品費	899
消		耗品費	1,101
人		件費	5,573
雑		費	227
		計	16,690

ニホンザル研究林

ニホンザル研究林設置計画については、昨年通り「ニホンザル野外調査」として予算の附されている下北を中心に、各候補地での研究活動および準備活動が行なわれた。

まず下北に関しては、とくに積雪期におけるZ群の遊動に重点をおき、これまで手をふれることのできなかった荒沢・橋ヶ掛沢方面（佐井営林署管内）を含めた行動域がかなり確実に押えられた。これにより、この地区の3つの群れの積雪期の生息域ならびに遊動パターンは、ほぼ完全に知られたことになる。

また今年は、昭和54年度に始まる向う10年間の下北経営区施業計画の編成年（昭和53年度）を迎えようとしており、青森営林局から意見を求められたので、「下北北西部山域に生息するニホンザルの現状に基く青森営林局今後の施業計画に対する意見書」をまとめて同局に提出し、サルの保全と森林施業との調和に関し、研究所の態度と要点を明らかにした。

上信越に関しては、これまでの研究の継続として昭和52年4月、11月、昭和53年3月の3回にわたって、横湯川・雑魚川・魚野川流域の自然群について、志賀高原野外博物館と共同で生態調査を行なった。また、横湯川流域の植生調査を準備中である。そのほか、科学研究費（ニホンザルの寒冷適応）によって、横湯川流域の志賀C群を対象として、臨床、形態、生態、生理、遺伝、生化学の分野からの総合調査の計画を進めている。なおこの地区に関しては、昭和53年度以降、下北と同様の予算措置が講ぜられることになり、その準備活動に入っている。

残りの候補地である木曽と屋久島に関しても、予備的研究が続行され、とくに屋久島におけるものは、純野生状況下におけるニホンザルの社会ならびに生態学的研究として、画期的なものになりつつある。

大 学 院 学 生

昭和52年度における京都大学理学研究科動物学専攻霊長類分科の学生、指導教官および研究テーマは次のとおりである。

氏名	学年	指導教官	研究テーマ
渡辺邦夫	D 3	川村 俊蔵	メンタウエイに生息する 霊長類に関する比較社会 学的研究
菅原和孝	D 3	河合 雅雄	ヒヒ類の種間関係につい ての社会学的研究
平石邦義	D 3	川村 俊蔵	霊長類の生態学的研究
松村道一	D 3	久保田 競	霊長類の随意運動の制御 におけるシナプス機構の 解析
B. S.	D 3	河合 雅雄	ニホンザルにおける活動 様式と行動の社会生態学
J. ブル トン	D 3	川村 俊蔵	湯河原におけるニホンザ ルの社会行動および社会 構造の分析
十川和博	D 2	高橋 健治	霊長類の組織タンパク質 の分解機作の研究
浜田生馬	D 2	久保田 競	皮質運動ニューロンの準 備的活動の研究
丸橋珠樹	D 1	河合 雅雄	ヤクザルの社会生態学的 研究
森山昭彦	D 1	高橋 健治	霊長類のタンパク分解酵 素の性状の研究
伊藤真一	M 2	久保田 競	注意発現の神経機構の研 究
川本 芳	M 2	野沢 謙	遺伝的変異よりみた霊長 類の系統に関する研究
小島哲也	M 2	室伏 靖子	ニホンザルの個体認知行 動の実験的分析
松本 真	M 2	江原 昭善	霊長類の顎・顔面頭蓋の 形態学的研究
川合恭子	M 1	近藤 四郎	霊長類足骨に関する形態 学的研究
船橋新太郎	M 1	久保田 競	スキルネルの神経機構の 研究
藤田和生	M 1	室伏 靖子	ニホンザルの概念学習に 関する実験的研究